

大阪民衆史研究会報

2025 年 2・3 月号

第 32 巻第 2 号

(通巻 353 号)

発行 大阪民衆史研究会 (代表 林 耕二)

事務局 〒 532 - 0001 大阪市淀川区十八条 1-1-32-908 竹田 芳則 方

E-mail: osaka.minshushi@gmail.com

例会のお知らせ

◇ 4 月例会

日時 4 月 20 日 (日) 13 時半開場、14 時開会

会場 大阪府教育会館 3 F 蘭の間

報告 小原公輝 (こはら よしてる) さん (河内いえまち再生会議理事長)
「重要文化財から学ぶ」

国交省の補助事業として、2010～2012 年にかけて、全国の重要文化財の建物と、その工事中を調査してきました。私に関わった 13 物件の内 5 件についてです。私なりに感じたことや、当時の職人さんの技の多彩さ、思い、今では無くなってしまいそうな技 (特に装工技術) を目にすることができ、感動の連続でした。

文化財は何故残さなければならないか？

◇ 5 月例会

日時 5 月 17 日 (土) 見学会「百舌鳥古墳群を歩く」

集合 13 時半 南海高野線 三国ヶ丘駅改札前 案内 平島将史さん

昨年巡検した古市古墳群と同時に 2019 年に世界遺産に指定された百舌鳥古墳群。その中心である大山 (大仙陵) 古墳はギザのピラミッド・秦の始皇帝陵と並んで世界 3 大墳墓 (面積・長さは世界最大) に数えられるが、その中に立ち入ることは禁じられ、かつその被葬者も宮内庁が治定する仁徳天皇ではないという見解が考古学的にはほぼ通説である。その古墳の巨大さを実際に足を運んで実感し、築造に当たった民衆の息吹に触れると共に、その周辺の古墳群を巡り、戦後古墳群の半分以上が破壊された経緯や、その動きに抗して古墳を守り抜いた市民の取り組みに学び、古代から近現代に至る権力者と民衆の相克、民衆の現実性を踏まえた動き等を看取する機会として、百舌鳥古墳群を巡検する。。

各例会 参加費 会員 400 円 非会員 500 円

1 月例会報告

浅井義弘さん（大阪歴史教育者協議会事務局長）

「地域に根ざす歴史学習－ワタから学ぶ日本の歴史」

1月18日（土） 大阪府教育会館

「地域」「実物」教材にもとづく教育

現在の学校現場は大変である。ICT活用、学習指導要領の実施強要、煩雑な観点別評価など多忙を極める。その中で、浅井さんは「なんでかなあ？」という生徒の疑問を大事にする授業、生徒に問いかける授業を大切にしてきた。「遠い過去の話」を身近にするため、「地域に関わる問題」、「実物」教材からアプローチすることにとりくんだ。「地域を学習するということは、低・中学年だけの仕事だけでなく高学年、さらに中学高校それぞれの段階で、それぞれに応じた学習を展開すべきものだと考える。だから、産業学習も歴史学習も絶えず地域から出発し、子どもたちが地域を調べることをもとにして、それぞれの学習の展開を考える」（南部吉嗣元歴教協委員長）ことを基本にしている。泉陽高校在勤中には、与謝野晶子の「君しにたまふことなかれ」石碑や妙国寺の「とさのさむらい はらきりのはか」石碑、堺県庁跡の本願寺別院などを見学して明治初期の歴史を、東百舌鳥高校では、土塔を見学して行基の布教活動と奈良時代の政治と文化を、考えさせる授業にとりくんだ。

ワタから考える日本史の授業

八尾市立歴史資料館でもらった棉を毎年生徒と植え「綿繰り」体験を実施、家庭科の先生の協力で「糸づくり」にも挑戦した。江戸時代の「農業の発達、商品作物の栽培」授業では、ワタ種を蒔いて発芽しても虫に食われたり、夏の水まき、台風でワタが倒れたりする体験からお百姓さんの苦労が少しわかる。明治の産業革命の授業では、「繰り綿」の繊維から糸をつくる体験をし、「縫いをかける」ということを説明し、「糸車の手作業から機械を使って大量生産」するのが産業革命だと教えている。

棉作の歴史

教科書では「秀吉の朝鮮出兵で、各大名がワタの種を持ち帰り植えさせた」と書いているが、永原慶二さん（一橋大名誉教授）の『新・木綿以前のこと 苧麻から木綿へ』（中公新書）では、後漢に南海から木綿が伝来、14世紀末から15世紀初に明の洪武帝の頃、木綿栽培と綿布生産が発展した。高麗に元から木綿が伝えられ、李朝で本格的に栽培され、応永13（1406）年に「日本国王」（室町幕府将軍）に「青木綿」が回賜（かいし：朝貢に対する返礼）され、1408年の大内家使者には「綿布」が、1451年の島津家使者には「綿布二三九四匹」が回賜されている。このころの木綿は舶来品で需要が高く高級品だった。日本では、律令の税として正丁（せいてい：課税対象となる成年男子）の庸（よう）は麻布、調（ちょう）の「綿」は蚕の繭からつくる「真綿」であった。国産木綿については文明11（1479）年史料に、令賢房という僧侶に「木綿壺端」が土

産に贈られた記録が初見（永原）。大阪では天文9（1540）年『室町殿日記』では摂津西成郡勝間で生産された「小妻木綿」が京都で取引されている。江戸時代の棉作中心地、三河木綿、伊勢木綿、摂津木綿は戦国時代に素地があり関東、東海、四国、九州など東北以外で広く棉作が行われていた。木綿の使用方法については兵衣、旗、幟、陣幕や馬具、火縄など軍需品が多かった。宮崎安貞『農業全書』（元禄10年）には木綿生産地について「河内・和泉・摂津・播磨・備後」などが記録されている。木綿生産は戦国～江戸期に爆発的に発展した。木綿は苧麻（麻）に比べ保温性や肌触りがよく、栽培・紡績・織布の生産工程で分業が成立しやすく商品生産・流通面で発展する特性にすぐれていたからであった。

授業の実践例

①天下の台所 大坂が「天下の台所」という意味を絵図や写真で蔵屋敷や東回り航路などの海上交通で全国がつながり大坂の木綿や銅が江戸に送られたことなどで確認させる。

②大和川の付け替え

堺では小学校から大和川の付け替えを習う。絵図で当時の洪水の多さ、被害を確認し、中 甚兵衛たち百姓の付け替え嘆願運動を紹介。推進派と反対派の意見も見る。付け替え後、新旧大和川筋で綿作がさかんとなった。ワタという商品作物は現金になり、貨幣経済が農村に浸透していったことを理解させる。肥料に鰯が大量にいるので漁法の拡大にもつながった。付け替えで、鴻池新田や三宝新田など新たな新田開発が行われたことにふれる。

③産業の発達と社会の変化

各地に商品作物の特産品が作られ産業発達と貨幣経済発展がすすむことを資料「高安の里」（八尾歴史民俗資料館）を参考に確認。「河内木綿」の名で木綿製品が普及した。綿や紅花など実物教材を見せる。貨幣経済浸透で本百姓の階層分解を考えさせる。宇田大津村（現・泉大津市）の織屋（天保14年）の資料で家族以外の人を雇用する大規模な織屋の存在、無高の百姓でも機織りだけで生活していける人がいることを知る。尾張名所図会では「マニファクチュア（工場制手工業）」の存在を確認。

④百姓一揆とうちこわし

経済発展の一方で一揆や打ちこわしが起こる原因を探る。高石市富木の楷定寺にある「土井忠兵衛の顕彰碑」を見て、1783年の千原騒動を考える。同年は台風、長雨で綿が不作だった。一橋領の百姓は銀納の年貢減免と延納願いを出した。拒否されたので百姓たちは一揆を起し下掛屋の川上佐助宅を襲った。堺奉行所の捜査と検挙の後、下掛屋の廃止、年貢の月延べ払いが認められた。当時幕府は株仲間を重視、農民の自由な綿販売が禁止され、問屋仲間が買ったたきをしていた。百姓は「国訴」という国を超えたたたかいをして自分たちの要求を実現していた。

⑤日本の産業革命

大阪紡績をとりあげる。同社は現在の大阪市内京セラドームの近所にあった。渋沢栄一

などが設立に関わった。資本金は当時 28 万円で、毛利、池田、蜂須賀などの旧大名や大倉財閥が出資した。イギリスから最新のミュール紡績機を輸入、最大規模の工場となった。原料は中国綿を輸入、労働者は近隣農村から集めた。その後、三重、天満、平野、東京などで大規模工場ができていった。大阪紡績成功の原因として、ミュール紡績機、中国綿やインド航路就航で入ったインド綿（安価な原料）、二交代制、長時間労働、若い女工さん（低賃金）、リング紡績機にイギリスよりも早く切り替えたこと、などを考える。

⑥社会問題の発生

低賃金や長時間労働の問題に対して労働者が立ちあがった。寄生地主制のもとで農家の子が工場の劣悪な条件で働かざるをえなかったことを理解させる。天満紡績のストライキの紹介。日清戦争後に労働争議がふえたこと、治安警察法が労働運動をおさえたことを理解させる。足尾鋇毒事件では住民運動が起こっても銅生産をやめなかった理由として、銅が武器の原料であることと生糸と並んで輸出品の中心であったことをあげる。

⑦大戦景気と大阪の変化

第一次世界大戦後、日本は空前の好景気となり産業構造が変化、独占資本が確立した。都市化、大衆文化の普及、大戦景気と「成金」の発生を考える。造船業と製鉄業の成長、輸出国・債権国となり在華紡ができた鐘紡や東洋紡績（大阪紡績と三重紡績が合併）が上海に進出、中国進出政策につながる。工業生産額が農業生産を上まわり農業国から工業国になり重化学工業発展で男子労働者が増えたこと。1925 年には大阪市の人口は東京を超えて「大大阪」に変化した。御堂筋が建設され、城北と城東が変化、工場がふえていった。小林一三の「阪急商法」を沿線宅地開発、宝塚歌劇、百貨店設立などの資料で考えさせる。

⑧世界恐慌と日本

世界恐慌の日本への影響を理解させる。財閥の経済支配、浜口内閣の金解禁、昭和恐慌で人々の暮らしがったか、小作争議と労働争議の増加について鐘紡争議などを例に考えさせる。綿糸生産が、家内工業から工場制手工業、機械性大工業に拡大し低賃金・長時間労働、労働運動の高まりなどを考えてゆく。

質疑

●小松さん 「泉大津出身で、実家が織屋でトヨタ織機 2 台があった。松原では古い織機で、茶こしなど目の細かい金網をつくる地場産業ができています。河内木綿があるのになぜ中国綿を使ったのか？」○答「繊維が長すぎ、ミュール紡績機にあわなかった。」「泉州は分業が進んでいたのだから安い綿花が入っても経営が続いた。」

●林 「実習や見学授業で、1 時間の枠ではむずかしいと思うが、2 コマなどの時間割はしているのか？」○答え「1 時間でやっている。」○小松さん「小学校では 1 時間で綿繰りを指導している。八尾の資料館で道具を貸し出している。」

●井沼さん「水田の横で綿を作って幕府が認めたのか？」○答え「『勝手作り仕る法』で認められ、そのぶんは年貢の対象となった。」「大阪紡績は、なぜ大阪からはじまったのか？」○答え「工場用地として国有地を借りることができたため」「インド綿と中国綿の

ちがいは？」○答え「インド綿の方が、繊維が長く安い」「紡績業は2交代制なのに製糸はちがうのはなぜか？」○答え「製糸は女工の手作業部分が多く、紡績は機械が大きく稼働させるために交代制にした」

(※すべての質問や意見を紹介できなかったことをお詫び申し上げます。)

当日の参加者は、報告の浅井義弘さんのほかに、松浦由美子、竹田芳則、井沼淳一郎、小松清生、日下恭子、林 耕二の7名でした。(文責・林 耕二)

若者の戦争認識

―「第59回「建国記念の日」不承認 2.11 大阪府民のつどい」に参加して 高島 千代(副会長・関西学院大学)

今年も「2.11 大阪府民のつどい」(於 たかつガーデン)に参加した。参加者は170人。少なくともコロナ以降、参加者は少しずつ減少しているのではないか。記念講演の前に、北泊謙太郎さん(大阪歴史協議会)が「私たちはなぜ「建国記念の日」に不承認の意思を示すのか」と題して報告されたのも、こうした状況を前に、本会の趣旨を再確認するためだろう。

そもそも、なぜ「建国記念の日」の廃止を訴えるのかといえば、それはこの日が、戦前の天皇崇拝や軍国主義と結びついた「紀元節」の復活にほかならないからだだろう。ただし、こうした問題意識が衰退した今日に至るまで「2.11」がこれまで続いてきたのは、この「つどい」が結果的に、ここ関西の地で人権・平和・民主主義に立脚して展開される様々な市民運動の結集点になってきたことも大きいと思われる。「文化行事」では、松原智美さんのアコーディオンの多彩な音色に驚かされたが、大阪特有の、こうした豊かなアプローチに、市民運動の幅の広さや元気の源が体现されている。やはり運動は、楽しくなければいけない。

それでは、こうした場を、これから、どのように若者たちに引き継いでいくのか。この点を視野に、「青年の戦争意識をどう育むか」、実践をもとに論じてくださったのが、久保田貢さんの記念講演「戦後80年 戦争の記憶と戦後日本の平和意識」だ。

久保田さんは、まず、「赤紙」という言葉を知らない学生、先ごろノーベル賞を受賞した「被団協」を知らない、佐々木禎子さんゆかりの「原爆の子の像」を知らない若者たちの姿に直面し、「青年層の戦争認識・社会認識を冷静に分析する」ことの重要性を指摘される。「君たちは何もわかっていない」と上から指摘するのではなく、まずは冷静に、かれらが何を知り、何を知らないのか、理解しようということだ。その上で、かれらが知るべきなのに知らないこと、これをきちんと伝えること、またなぜ、これらの知識を教育の現場がとりあげられないのか、こうした点にも目を向け、支援したいと話された。

また、ご講演は、各地にある戦争ゆかりの史跡や碑を題材に、実際の教育研修さながら、

若者の知るべき歴史をたどられたが、ここでは、本会の故二宮一郎さんが中心になって尽力された「小説 火垂るの墓 誕生の地」の碑もとりあげられた。また、お話しの中では、柏木功さんら「大阪市内で戦争と平和を考える」有志が作成した HP「大阪市内で戦争と平和を考える」(<https://jinken-kyoiku.org/heiwa/index.html>) も紹介されたが、一つ一つ訪ね歩いて調査された皆さんには、本当に頭の下がる思いだ。こうした建碑に結実する様々な市民運動があつてはじめて、戦争を知らない青年たちに、リアルな（本当にあった）戦争の一端を体感させられる。

久保田さんは、戦争の歴史の実態を「加害」「被害」「加担」「抵抗」に分類とすれば、現在の青年層の歴史認識は「被害」のごく一部に限定されているという。そして、そうした認識を形作った背景には、「戦争・憲法を軽視した教育内容・政策」「教育についての国家統制強化」「歴史修正主義の横行」「教師の多忙化」「新自由主義社会」（その時間軸の短さ、自己責任の強化とタイパ・コスパの重視）があると指摘されるが、これらは私の実感とも一致する。2022 年の映画『教育と愛国』でもとりあげられたように、「教育についての国家統制強化」は、いまや「歴史修正主義」や、個々人の人権より国家を重視する立場を共有した一般市民による学校教育へのクレームへと広がっているからだ。

一方、ご講演を聴いて私が感じたことは、「戦争」に対するリアルな認識を育むだけで、現在の有事思想をこえられるだろうか、ということだった。というのも、私の周りにいる学生は、「戦争」のリアルをそこまで知らずとも、戦争は絶対したくない、徴兵には行きたくないという気持ちを強くもっている。しかし、そのような学生が、戦争を回避するために選ぶ手段は、「軍備による抑止」なのだ。大半の学生は、日本が自ら他国を攻めることに反対であり、軍事力の行使は攻められた際の防衛にとどめるべきだという。つまり、現在の「若者」にも「専守防衛」意識が根付いているともいえるのだが、悲惨な「戦争」の実態を知ったからこそ戦争を回避したいという点とともに、戦争をしない、あるいは攻められないためには、日本も軍備を整えねばならないというのが、かれらの考えなのである。

もちろん、これは私の印象・実感レベルの話にすぎない。しかし、もしこれがある程度、一般化できるのであれば、「戦争」の歴史を教える際には、「戦争」のリアルの一部として、軍備による「抑止」が「抑止」に止まらず、相手に対する「脅威」となり、それが「軍拡」ひいては「戦争」につながった政治過程もまた、はずせないように思われる。

久保田さんや柏木さんの実践を、こうした方向へと結びつけてはいけないものか—そんなことを考えさせられた一日でした。